

帰することが出来ました。

農家として一生懸命努力したため勲六等の叙勲を受け、農業委員、農協理事等を経て今日に至っていません。

先年サラリーマンの長男が「父さんは年をとったから今後田畑は自分が引き受ける」と申し出がありましたので、新しく農機具一切を購入して与え、世代交代を終わりました。

鉄道警備 異常なし

大阪府 山本幸一

出征の時の私の家庭は、父母とも健在で、実兄二人と義弟三人で農業を営んでおりました。母は義理の母です。私は家業の手伝いをしていましたが、そのうち大阪に奉公に出て、昭和十七年一月に徴用になり、陸軍造幣局で働いていました。昭和十九年の検査まで約二年半の間です。独身寮もあり、そこからの通いでし

た。

昭和十九年十一月十日現役兵として、歩兵第二二連隊補充隊（通称「鳥取第四十七部隊」）に入隊、直ちに中国の独立歩兵第二三一大隊に転属になり現地で終戦を迎えました。

その間、初年兵教育―鉄道警備―野戦自動車廠勤務―終戦―復員と南方諸島やビルマ戦線に比較すると平穩な勤務でしたが、それなりの苦勞がありました。

昭和十九年十一月十九日、独立歩兵第二三一大隊に転属。

博多―釜山―新義州―安東―山海関を通過し、十一月二十二日に南京に下車。二十八日南京出発、十二月一日漢口下車。十二月四日漢口出発、五日応山下車。

十二月十二日に独立歩兵第二三一大隊第二中隊に編入され、應山地区警備の任に就きました。

昭和二十年の正月を初めて外地で迎えた時は日本のこと、村のことが思い出され、異郷に居ることを痛切に感じました。また、その寒いこと、朔風吹き荒れるのを身をもって感じました。戦時下で着るものがない

い、食べるものがないと言っても内地の方が余程よいと思えました。三月を過ぎるまでは風と寒さとの戦いでした。

検閲も無事に済み、昭和二十年二月十五日、廣水地区警備を命ぜられ、京漢鉄道地区警備の命を受けました。

飯村軍曹を長とし、上等兵一人、初年兵十一人の十三人の分哨でした。軽機関銃一挺と小銃十三挺と軍用犬が武器の総てです。

第二中隊長は松江市出身の多久和徳中尉でした。ちなみに第二中隊の兵士は初年兵を除きほとんど京都出身者でした。

地区警備隊ですが、主たる任務は京漢線の警備です。文字通り点と線の確保でした。京漢線は北平と漢口を結ぶ大動脈で、鉄道線の確保のため、沿線の部落、住民の宣撫工作も重大な任務でした。

僅か十三人で分哨を警備し、周囲に睨みを利かすのですから、毎日が緊張の連続です。陣地強化のため毎日が陣地構築と鉄條網の補強で、また塹壕を広く深く

掘り、壕と壕とを結ぶ連絡路も掘りました。夜間になると六人が鉄道警備の巡察に出かけ、残り七人で陣地の守備をします。

復員してから、太平洋上の孤島、ビルマ・比島・沖縄等の戦闘の状況を聞いたり、本を読んだりしてその激戦ぶりを知りましたが、中国―満州では地区警備と鉄道警備が主体だったと思います。特にあの広大な中国を僅かな兵力で治安を維持するのですからおのずから点と線の確保になり、線と言えば鉄路の確保ということになり、我々鉄道警備の任を誇りに思っております。

毎日毎日、緊張の連続で鉄道警備が終わり、明け方分哨に帰るとぐったりしてしまい、朝食もそこそこに昼過ぎまでぐっすり熟眠してしまいます。

ときたま、近くの部落に巡察に出かけ、部落民と友好を深め併せて情報の蒐集に努めました。部落民が襲撃の手引きをするとか、便衣隊を隠すとかはありませんでした。正規軍か雑軍か区別もつかず、殊に八路军の存在をいつも無気味に感じました。

三月のある夜、非常呼集がかかり、全員武装の上、各自の塹壕に入り「敵さんごさんなれ」と待機です。夜空に星はなく、真つ暗闇です。

どうやら、分哨が夜襲の目標らしく、ドカーンという迫撃砲の炸裂する音、機関銃の曳光弾で、一瞬周囲が明るく照らされます。頭の上を小銃の弾がピューン、ピューンと飛んでゆき、思わず首をすくめました。

こちらも敵の発射個所に照準を定め機関銃と小銃を撃ちまわります。立木で大体の距離が分かるのですが、真つ暗闇のことで目測出来ません。敵の弾道は頭上より大分高く、我が方も闇夜に鉄砲の気がしました。頭上高い敵の弾でも気持ちの悪いものです。

飯村班長が「皆、大丈夫か」と大きな声で確かめ「本部から応援が来るからな」と励ましてくれました。しかし、應山の中隊本部に連絡しようにも電話線が切断されて救援の依頼ができません。切歯扼腕するも如何ともならず、救援が来るまで陣地死守を覚悟しました。

幸いなことに暗闇であること、我が兵力、戦力を敵は正確に掌握していないらしいこと、夜襲を苦手としていること等で遂に夜の白兵戦までに至りません。

陣地に突入されたら僅か十三人の分哨では防ぎようがなかったでしょう。今思ってもゾーッとする一時です。朝、白むまでと防戦これ努めました。しらじらと朝がくる前に敵は撃ち方を止め潮の引くように退いていき、しばらくして本隊が救援に駆け付け、陣地死守の大役を果たしました。

迫撃砲・機関銃・小銃の弾を雨・霰のように浴びたのは生まれて初めての経験でした。その後、しばらく落ち着いた日が続き、陣中勤務と鉄道警備の毎日です。

炊事は分哨で行いました。穀類、肉、調味料等は週に一度、中隊本部から給与されましたが、野菜類、鶏卵等は現地購入もしくは現地調達でした。

水汲みが大変でした。小高い丘にある分哨から丘の下に下り、少し離れた部落の井戸まで毎日、しかも朝夕二回行くのです。たまに部落の人に頼むのですが、

防諜と衛生上（毒入りを防ぐ）から極力、兵二人で交替に水の運搬をやりました。

思い出したようにP51の襲撃がありましたが、取るに足りない兵力と見たか、本格的な爆撃には一度もありませんでした。

昭和二十年五月十日、漢口の第二十四軍自動車廠に転属を命ぜられました。私は修理班に配属され、板金の型抜き、ヤスリの仕上げ等をやらされました。毎日または週に何回かの学科として次のことを学びました。

科 目

自動車の組み立て エンジン部門 電気と配線

自動車の種類と性能 自動車の運転

班は次の編成です。

吉岡 弘 兵技伍長

出口 忠次 〃

山本 幸 陸軍歩兵一等兵

初年兵 二十人

野戦自動車廠への転勤は唐突のようですが、私の入

隊前の経歴は陸軍造幣局の徴用ですから、それが考慮されたでしょう。

第三十四軍自動車廠は約五〇〇人くらいの軍人軍属がいましたが軍人は兵技関係の人がほとんどでした。軍属も技師・技手です。

転属して数カ月の実習・学科がありました。徴用時代の職が役に立ち覚えるのも早かったように思います。歩兵の内務班教育のような陰惨は無く、次の教育が待ち遠しいくらいでした。

この自動車班は第十一軍の地下工場を引き継いだもので、支那派遣軍の中でも指折りの工場と言われました。

八月十五日に終戦を迎えましたがディーゼルで自家発電をし、作業を続けました。国共内戦に備え、日本軍の兵器、特に輸送手段としての車輛が大切にされたのでしょう。ほとんど従来命令系統で動いていました。食事も第三十四軍の炊事班が支給し、従来と変わりなく内容は良いくらいでした。

敗戦の混乱が落ち着き、内地復員の日が近づくにつ

れ、修理工場、自動車、部品などの中国側への引き渡し、修理の知識の中国側への伝授も急ピッチに行われ、中国からめぼしい技師・技手への巧みな言葉をもつての残留勧誘が激しくなりました。これに応じた人も何人かいたようですがその後の様子は分かりません。

抑留中、一番苦労したのは医療品の不足で特にキニ―ネ等の欠乏には苦しみました。

無事復員した時、家族は皆無事なので、抱き合っていました。帰国してからしばらく農作業を手伝っていました。三年後に天麩羅油製造の会社に職を得て定年まで勤めました。現在も大病もせず、元気で暮らしています。

弾部隊 芷江作戦

山形県 今田 榮

(旧姓 松田)

私は山形県北村山郡山田村で生まれました。生家は両親と長兄、私、弟、姉一人の六人家族で、米作と養蚕の農家でした。私は現役志願ですが入隊まで農業を手伝っておりました。志願の理由は父親が近衛兵であったことと、長男が近衛兵として長く軍隊に勤めていた(下士官)のですが北支から除隊してきたこと、さらに当時の軍国主義から徴用に取られるくらいなら早く志願しろと父や兄に勧められたことです。

昭和十八年五月に一般徴募の徴兵検査と一緒に受験、見事一発で合格し喜んでいたら、二カ月後の七月に兄が弘前の連隊に入ることになり、追いかけるように私の入隊通知が八月十五日に来て、翌月の九月五日に山形連隊(北部第十八連隊)に入隊することになり